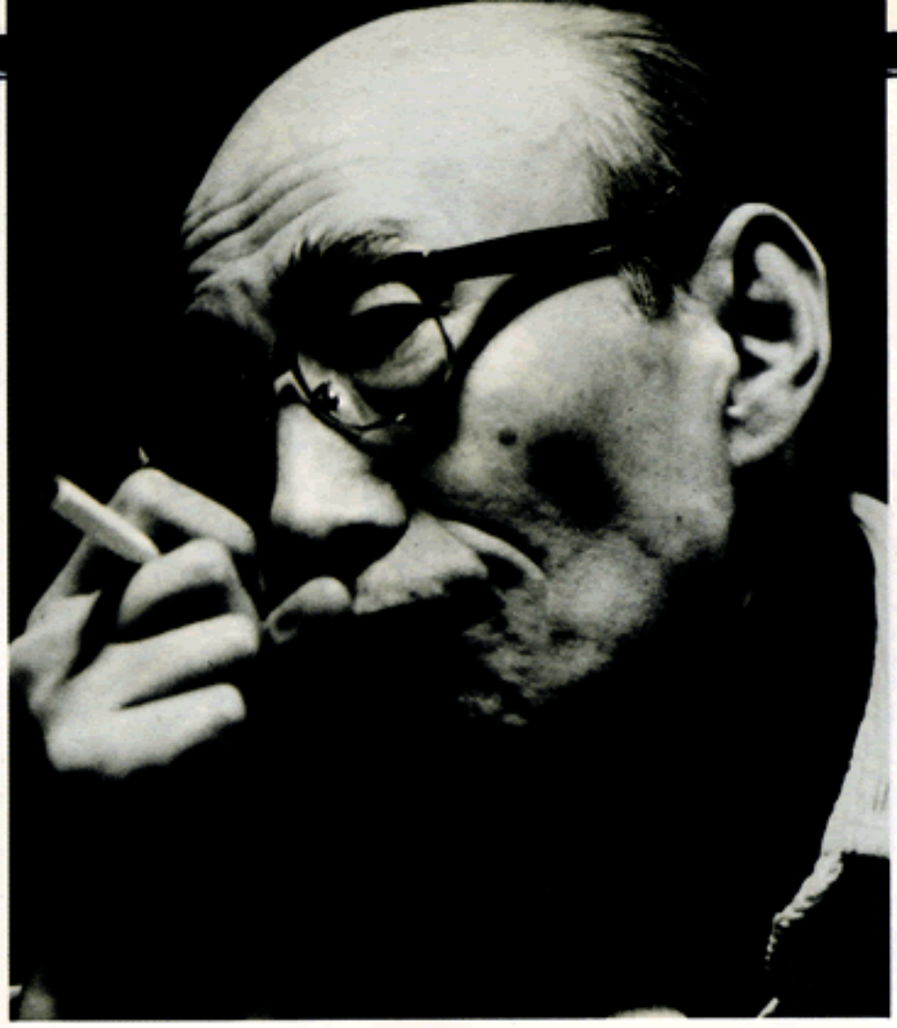


努めるだけなのであるが、この筋道を感ずることができればできるほど、私は氏の前でことばを発することができなくなるのである。

おそらくはここで問題となる最大の眼目は、「私が私の目で見る」というこの私というのは何であるのか、またわかるというのはどういうことなのかということなのであろうが、これをもし、氏から伝達されるときには、ことばというものを介在させなければ理解し難いという私たち一般人の身に備わった性癖のために、私には氏の歩む方向は察知しえても、これをわかるという段階には、とうてい達しえないのである。

氏は私のこの状況を危ぶんで、今回のこの対話に際して、前後4回、14時間にもわたって氏の悟りつつある真実について語ってくれた。元来氏は、世との一切の妥協を排除して、心の納得ということのためにのみ生きる希有の人であるので、氏の語るところには私たちが生きるということ、音楽すること、教育ということ一切の根源がひそむはずなのであるが、残念ながら私にはそれらを明かす力がない。ただ幾つかのことばの断片を紹介するにとどまることを、読者は御寛恕頂きたいと思う。

「対話」

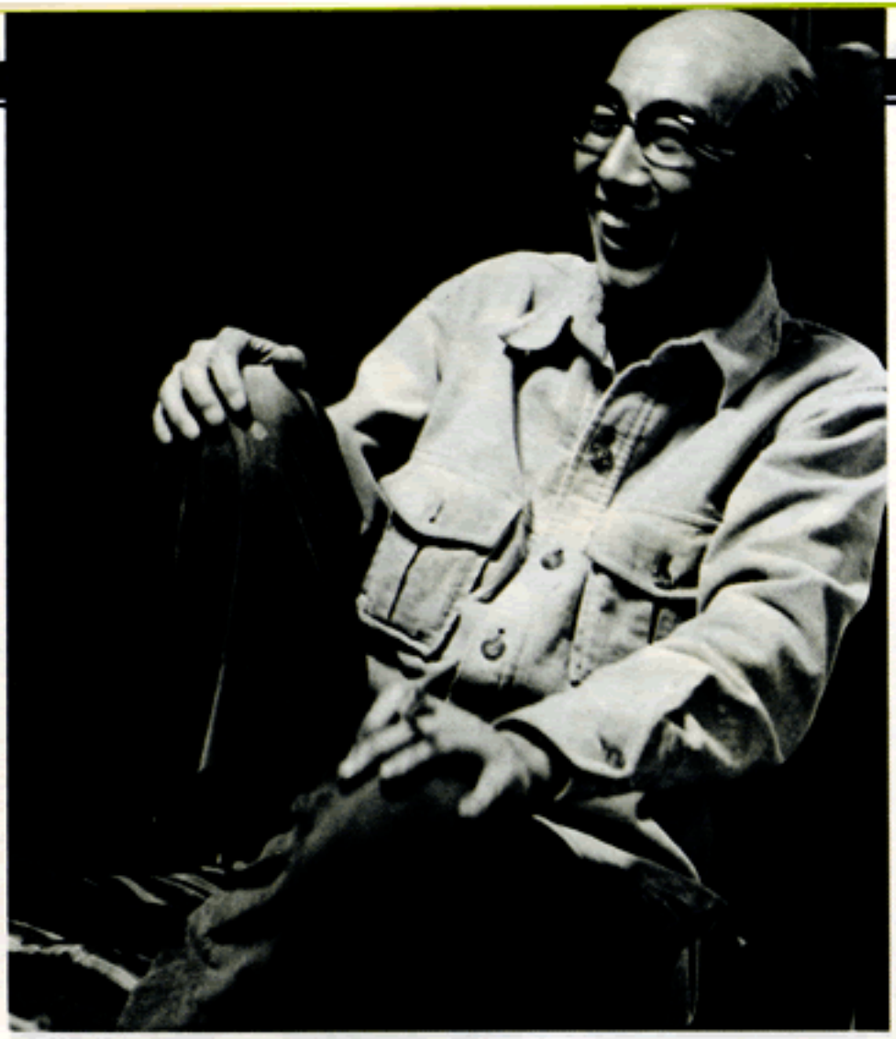
佐藤 この間も音を聞くという問題がでたけど、音楽を聞くということと、音を聞くということ。ただの自然音を聞いて楽しむということがあるね。ただそこに流れているせせらぎを聞いたりする時には、いわゆる注意集中の契機はずっと少ないわけだよ。それは、何もしなければただの騒音としてある。だけど、潮騒がいいなあ、せせらぎが何ともいえない妙音を発している、松籟がいいなあというように、いいなあと聞くことがある。音をいいなあと感ずることが人間には実際にあるわけだよ。音楽というのはリズミックな刺激によって大脳新皮質の働らきが鈍麻され、自己抑制がとれて開放感を感ずるからいいんだっていうけれども、音を聞くというのはそれだけじゃあなくてね。せせらぎとか松籟の場合には、そういう契機はないんだからね。それにもかかわらず、いいなあということがある。日本には伝統的にこういう騒音にたいする愛好がある。こういうものまでが音楽の中で見直されてきたということが、戦後の音楽史に現われたわけだよ。そうするとね、教育という場の中で、ふつうに音楽といわれているものだけじゃなくて、音そのものを聞く態度を教えてやるというか、目を開かせてやることができるならば、それもやっていいことの中に入ってきたんだよ。難かしい問題だけどね。昔メニューインがインド音楽のレコードの解説に書いていたんだけれど、ある音楽を聞こうとすると、その分の精神的な資格がないと駄目だっていうわけなんだよ。

中嶋 資格っていうと先天的な感じがするけど、それはもちろん後天的なものでしょう？

佐藤 いや、これは宗教心的なものだよ。音楽を聞くにはそれだけの享受能力がいるという。享受能力といえば、ここではより深く神に接触できるという意味だよ。要は味わえるだけの資格がなければ、それを味わうことができない。音楽というのは瞑想ということとも関係するよね。

中嶋 まあ最終的にはそうだと思いますけど。たとえばわれわれがインド音楽を聞く資格っていうと、一ぺんにうんと深いところへ行ってしまうけれども、実際には、ふつうのインド人たちはインド音楽を享受してるわけですよね。でもふつうのインド人がそういう資格を備えているということはありえないんで、だから、学習とか教育という場合には学習可能な音楽の構造とか……。

佐藤 もちろんそうだよ。だからぼくがいま資格っていってんのは、瞑想能力に応じた音楽しか聞けないってことだよ。というのはね、音楽というものは、抽象的に、肉体とかかわりなく瞑想ということを要求するのではないし、音楽は生理的な働らきを否応なくもつから、瞑想というものを純化した状態ではいえ



ないんだけれど、そういうもの全体を含めた上で、聞く人の瞑想能力に応じて、人が聞くことを許される音楽というのが、限定されるということだ。たとえばね。法竹の旋律がちょこちょこ細かく動くというのは、ある浅いレベルで聞くんであって、それがね、もっと深まっていくとぼうーという風が吹き通るような自然音ね、こういう純音を聞ける方がより深まっているということを、海童道という人がいっていたよ。こういう非常に単純なものを聞くっていうこと、音にピタッと意識をつけていくっていうことが、瞑想というものと結びついている。一つの音の流れを観察し続けていくっていうことは、これは集中の問題なんだよね。で、こういう風なエンジョイの仕方っていうのが、小川のせせらぎや、松籟を聞くっていうことに似かよっているんだよ。寒山の詩にね、「近く聞けば声いよいよし」っていうことばがあるんだよ。近くっていうのは、親しくっていうのとおんなじだよ。親しくっていうのは、一つになること、そのものがそのものを聞くってことだよ。そうするとね、これは人間の究極の目標とおなじなんだよ。戦後の音楽にはJ・ケージなどが出てきて、ケージの意図がどうあれ騒音の問題が出てきたというのは、その中から価値あることを導き出すとするならば、聞くという態度の問題だよ。音楽のよし悪しを、音楽の構造を分析することによっていうことと、このことだけではやはりよし悪しをいうことはできないのであって、聞くということ、享受ということから何かが問題にされる必要があるんだよ。この享受というのは、結局人間の集中能力の問題になっていくでしょうよ。

中嶋　ちょっと話はずれるかも知れませんけど、たとえば精神医学の方で性格というものを、クレッチマー以来個人の属性として一方的に対象化して、観察、分類してきましたよね。だけど最近は交流分析といって、人間関係やコミュニケーションの中で性格がいろいろな現われ方をすることに着目する理論が、考えられつつあるんです。だから音楽の方でも、分析的研究とかいって音楽を対象化し、その範囲の中だけで音楽の美とか価値とかを決定しようとするのではなく、あくまでも聞く側の立場をも含めつつ、両方のかかわりの中で音楽をとらえようとするあり方と、今のお話を解釈してもいいんでしょう？

佐藤　ああ、そこんとこね。今その両方の側でという場合には、当然コミュニケーションが問題になるけれども、そのコミュニケーションということを切り離してしまっても、人間の享受ということの重要性に目を注ぐということだ。要するに、音を分析してそれがよいとか悪いとか価値づけをする場合には、音がある働らきをもっていて、その効力が人間に効果を及ぼすというふうに考えるわけだよ。でもそういう受動的な態度だけでは、世界は暗くなるというわけだ。ものがそういうように行なわれると考えてしまうとね。何でもかんでもやって頂いてもらうということで音楽を聞くっていうのは、くすりを飲むのとおんなじになってしまう。そういうことでいけば、音楽はそれ自体のもつ刺激をますます増すという方向に進んでいくんだよ。

中嶋　その享受という場合にですね、受動的にくすりを飲むみたいに受けとるという問題と、もう一つ、今先生がおっしゃっているのは、こちらからどうやって積極的に、能動的に働らきかけながら、聞くという態度を確立するかという問題なんでしょう？

佐藤　そのねえ、まあ働らきかけるといえば働らきかけるなんだけれども、その前にね、享受というのは何かということがあるわけでしょう。この問題を堀っていくとね、君にはまとまりがつかなくなってしまうと思うんだけどね。道元禅師がね、こういうことをいってんだよ。「身心を挙して色を見取し」、挙しっていうのは、あげてだね。色っていうのは、目に見える物だよ。また、「身心を挙して声を聴取するに」、声というんだが、これは音だよ。「身心を挙して色を見取し、身心を挙して声を聴取するに、したしく会取すれども、かが